

“音楽”という生き方

－「音楽表現指導法」を解体する試み－

町田 育弥

はじめに

自身が担当する「音楽表現指導法」シラバスの「授業概要」に、筆者は次の様に記している。

～音楽をあらためて定義し直し(*1)、(中略)保育の現場において「音楽」という名のもとに行われる諸活動の詳細な分析を通して、それらの活動における真の意味での「音楽」発現の可能性を考える。(後略)～

また、「到達目標」には次の様に記している。

～音楽は意識の裡に生じる内的体験の一樣態であり、必ずしも「音」を契機とするものではないことを理解し(*2)、その体験を喚起しうる働きかけと、阻む働きかけを峻別できるようになること。(後略)～

(*2)は「到達目標」として書かれているが、実際には前提となる。これは出発点であり、まずその認識に立つところから始めなければならない。このことは、「授業内容」冒頭の(*1)で簡単になされるものと筆者は思い込んでいたが、それがとんでもない思い違いであることが最近ようやく分ってきた。とりわけ、音楽が「必ずしも音を契機とするものではない」とする考え方は、学生にとって受け入れ難いことであるらしい。しかし、何はともあれ「音楽表現指導法」である。“音楽”の意味を共有できなければ先へは進めない。しかも、“表現”についても筆者の見解と学生のそれは大きく乖離しており、その溝を埋めることに四苦八苦している。四苦八苦しながらも、このシラバスを変更する意志はない。その理由は2つある。ひとつは、今のところ“音楽”や“表現”についての自身の考え方が間違っているようには思えない(少なくとも方向性としては)こと。もうひとつは、筆者が保育現場における“音楽”や“表現”指導のありかたにある種の違和感を感じており、その違和感が保育に関わる人達の“音楽”や“表現”についての誤解(筆者から一方的に見て、という意味である)に起因しているように思えるからである。

筆者の基本的な音楽観については、自著その他様々な媒体に書いたり、音楽指導者

(主としてピアノ教師)を対象とするセミナーなどで再三述べてきた。もちろん授業でもしどろもどろに語り続けている。本稿では、それら、言わば書き散らかし言いちらかしたあれやこれやを振り返りながら、～そもそも“音楽”とは何か？それは“表現”されるものなのか？されるとすれば、それはどのようにか？さらに、“音楽”やその“表現”を“指導”するとはどういうことか、また、それは可能なのか？可能だとすれば、それはいかにしてなされ得るか？～などについて、実際に筆者が行った授業の様子をもとにした「仮想授業」の記述をまじえながら考えていく。

これをもって、自身の音楽観を再検証するとともに、保育に関わっている、あるいは関わろうとする多くの人達への問いかけ、問題提起としたい。

1. 音楽から“音”をはずすー1

～音楽って、どういうこと？～

この問いを、筆者は毎年最初の授業で学生に向けて発することになっている。返ってくる答えは多種多様。最も多いのは文字通り「音を楽しむこと」という答え。試しに、それに異を唱える者は？と問うと、居ない。次のような問いを投げてみる。

～ある人が、大好きな曲のメロディを思い浮かべてうっとりしている。また、ある作曲家が散歩しながら懸命に次作の一節を考えている。この人たちは「音楽をしている」といえるだろうか？～

意外なことに、大半が「Yes」と即答。

～なぜ？だって、音は鳴っていないんだよ～

「しまった」の顔ちらほら。試しに「彼らのやっていることは音楽ではない」と断言できる者は挙手せよ、と言っても手は挙らない。

ある年、こう答えた学生がいた。

「大好きな曲のメロディを思い浮かべてうっとりしている人は、過去実際にそのメロディを“音”として聴いた経験があるからそれができるのだと思います。だから“思い浮かべてうっとり”という音楽のありかたも、やっぱり音がないと成り立たないと思います」

秀逸な答えである。が、これを受けて、以下しばし問答。

Q：では、作曲家の場合はどうだろう？彼が今想像している一節は次作、つまり、まだ一度も鳴ったことのない、誰も聴いたことがないものなんだが？

A：前の晩に家で思いついてピアノで弾いたりしたんですよ、きっと。それを思い出しているんです。

Q：いや、この散歩中に突然思いついたメロディなんだが？

A：歩きながら口ずさんで、声に出しているとか……

Q：黙って想像しながら歩いているのだとしたら？

A：だとしても、考えているのは要するに音のことです。だから、それ抜きに彼の行動を考えることはできません。音楽にはやっぱり音が必要なんだと思います。

2. 音楽から“音”をはずすー2

音楽から“音”をはずすのはなかなか難しい。そこで次のような実験をしてみる。

【実験－1】

筆者が一定の時間間隔で(たとえば5回)手を叩き、5回目に1(いち)と言う。学生には、その間隔を引き継いで無言でカウントし続け、ある回(たとえば15回目)に達したと思うところで手を叩くように指示する。(譜例－1)

譜例-1

♩ = 40~100

この間隔を引き継ぐ

学生：この間無言でカウントし続け.....

ここで手を叩く

教師：手を叩いて...「いち」

無言カウントが始まる瞬間から教室は静まり返る。10のあたりから緊張感が明らかに高まってくるのが分り、次第に不安げに周囲を伺うような素振りを見せる学生も居る。そして15と思しきあたりで、バラバラに手を叩く音が鳴り、笑い声起きる。

再度試行。前回より少し早めのテンポで行う。さきほどとは違った「意気込み」のような気配が感じられ、カウント中に視線を交わし、微笑み合う者も居る。最後のクラップ音がほぼ同時に鳴り、笑い声に「おっ」という歓声も混じる。ここで問い。

～今のは「音楽遊び」と言えると思う？～

ほとんどの学生が「Yes」と答える。理由を訊くと「音が鳴るから」「数えるところがリズムに関係あるから」など。「最後に手を叩くのではなく楽器を鳴らすことにすればもっと楽しい」という学生も居る。さらに実験。

【実験-2】

今度は実験-1から“音”を排除してみる。学生を二人一組とし、手をつながせる。導入の5カウントのところで筆者は手を叩かず、黙って一定速度で指揮をするように手を振る。その後の無言カウントは実験-1と同様に行い、学生は、15回目に達したと思うところで相手の手を強く握ることとする。(譜例-2)

譜例-2

♩ = 40~100
この間隔を引き継ぐ

学生：手を握り合って無言カウント……

教師：無言で指揮

相手の手を強く握る

無言カウントの最中にクスクス笑いがあちこちで起こる。15カウント付近では「キャア」という嬌声や爆笑も起こる。勝手に相手と感想を叫び合う者も居る。「○○ちゃんたら、途中で手がびくん、びくん、てするから可笑しくて」「凄い目ヂカラで睨むんだよお」「14のところでぎゅって来たからびっくりしたよ」etc.

～今のは「音楽遊び」と言えると思う？～

今度は少しためらいがちな雰囲気が漂い、「Yes」の即答は返ってこない。

3. 音楽という“生き方”

～「そうだ」と言いにくいのは、今のは“音”を使ってないからだね。皆さんが「音楽とは音を楽しむものだ」に賛成していたことを考えれば当然です。で、皆面白がっていたよね。心が動いていたよね。特に、無言カウントの間。最後に手を叩いたり、ぎゅっと握るところも面白かっただろうけれど、その瞬間を除外したらどうだろう？

2つの実験で感じた面白さは、同質のものだったんじゃないだろうか？

実験で皆さんが一生懸命カウントしていた何秒かの時間、その間、自分がどんな“生

き方”をしていたか思い出してください。とても集中して、緊張して、自分を厳しくコントロールしながら、スリルを感じて、ドキドキしていた筈です。顔や態度を見ていればわかります。とても濃い自覚に満ちた時間だったのではないのでしょうか？そういう風に生きていた、そういう生き方。それが音楽の正体だと私は考えています。最後の「ばん！」や「ギュッ！」で起った笑いは、その生き方を解除するブザーのようなもの。面白かったのはその生き方であって、クラップ音が鳴ることや、手を握ったり握られたりする、そのこと自体ではなかった筈です。音があっても音がなくても、同質の面白さがあった。もしその面白さが音楽の正体なのだとすれば、“音”は“音楽”の必須条件ではない、ということにならないだろうか？～

こうして、いささか強引に～音楽は意識の裡に生じる内的体験の一樣態であり、必ずしも「音」を契機とするものではない～という定義に持ち込もうとするのだが、当然学生はまだ納得しかねる様子。これに反論するのは簡単で「2つの実験で行ったこと、行った人の身に起こったことは、どちらも音楽ではない」とすればよい。音楽は音を楽しむことなのだから、クラップ音を楽しんだわけではない最初の実験で起こったことは音楽とは言えない。第2の実験には音が要素に含まれないのだから、そもそも音楽とは無関係だ。と考える。この考え方も一応学生に提示しておく。まだ、音楽から“音”はずれない。

4. “きく”ということー1

前項の仮想授業(ほぼ実際の授業のやりとりそのものだが)で述べていたような内容を、筆者はかつてこう書いたことがある。

～過去を省み、今を自覚し、未来を想像しつつ自分を営み続ける。漫然とかもしれないけれど、人はまあ、そうやって生きている。音楽とは、これを漫然とではなく、あらゆる瞬間においてできるだけ精密に、克明に、徹底的に行い続ける、という生き方です。このような生き方を「みみをすます」と私は よびたいと思います。)

－中略－「みみをすます」という生き方は、音と 関係のないところでも営まれます。一文字を描ききる何秒かを、投手が振りかぶってから打球が処理されるまでの何秒かを、鼻先で漂わせて飲み下すまでの何秒かを、書家も三塁手もソムリエも、全身全霊でみみをすまして生き抜く。この営みは、いわば「素」の状態とは 別に流れる切り取られた時間の中でなされ、その間すべての出来事は、その時その瞬間においてこそ意味がある。このような状態にあって音と対峙する とき、はじめてそれは「音楽」とよ

べる営みとなります。～

ここで筆者は「みみをすます」という言葉をキーワードのように使っているが、その意味が必ずしも聴覚と結びつけて用いられているわけではないことは容易に理解出来るであろう。では、「きく」はどうか？

「きく」を、日本人は色々な意味に使っている。もの音をきく、酒をきく、道順をきく、事情をきく、鼻がきく、ネジがきく、願いをきく、葉がきく、きき腕…etc.

これらの「きく」は、注意深く判断しようとする、関係性を理解しようとする、鋭敏である、作用する、受け容れる、自在である、などの意味で使われており、それらは、筆者が考える音楽の本質的属性と非常に緊密に結びついている。ぴたりと符合すると言ってよい。これらの多義を包括する言葉として、「きく」を「音楽」に替えて用いることを国語審議会あたりに提案したいぐらいだ。

ちなみに、西欧で「音楽」を意味する言葉として使われるMusic(英)およびその類語は、言語や芸術など人の知的活動全般を司るギリシャの神「ムーサ」の成せる業「ムーシケ」が語源であり、「音」という意味を含んではいない。にもかかわらず、西欧諸国でもMusicといえば(いわゆる)「音楽」を指す言葉になっている。

それはなぜか？

5. なぜ「音」なのか

無言カウントの実験で学生が行っていた「みみをすます」生き方が、切り取られた時間の中で営まれていたことは確かである(前記引用文下線部)。このような生き方は、あまり長時間にわたって行うには無理があり、そして音は、時間を切り取るのに非常に便利なのだ。音は、等間隔であることや、長短を組み合わせることで時間の秩序を構築し、それを明示することができる。また、高低の変化や強弱、重ねられることによるハーモニーで時間に質感を付与し情緒を刺激することができる。そして常に留まることなく流動し、「そのとき」を過ぎれば痕跡を残さずに消え去る。音の持つこれらの機能や属性は、切り取られた時間の中で「その間すべての出来事がある」という瞬間においてこそ意味がある」ような生き方を容易に誘発するのである。ただそれだけのことなのだ。

6. 時間と秩序

～ここで「時間」というものを考えてみます。さきほどの実験では時間がとても重要な意味を持っていたことに気付いている人も多いと思います。まず私が手を叩いてテンポを決めました。時間というあいまいなものに秩序を投入したと言ってもいいし、皆さんを時間的に拘束したと言ってもいい。もし私がこれを行わずに「それぞれ勝手に15カウントして15の瞬間に手を叩け」と言ったとしたら、ただ何となくあちこちで散発的に手が鳴るだけで面白くなかった筈です。私が秩序を投入したことを受けて、皆さんはそれを維持しようとした。強いたおぼえはありません。「俺のテンポを守らないと単位をやらんぞ」とかね。何人かとても反抗的な人が居て「あいつのテンポになんか従うもんか」と思ってもよさそうなものですが、そういう人は居なかった。これは皆さんがとても従順で素直なヨイ子ちゃんだからだ、ということではない。秩序、特に時間における秩序を自分の中に取り込むことは、人にとって本能的に“快”なんです。だから私の示したテンポに乗っかることを抵抗なく、むしろ積極的に受け容れて一生懸命にその秩序を維持しようとした。そして、無意識にかもしれないけれど、他の人達と同調しようとした。最後に同時に手が鳴ったり、ギュッと握り合うようにしるなんて、私は一言も言ってないよ。皆さんがそう望んだんです。そしてそうなるように自分をコントロールしようとした。この努力は、とても近い未来に目標が設定されている方が行いやすく、また集中して楽しむことができます。

たとえばじゃんけん。「じゃんけんぽん！」1回は2秒もかかりません。そのかけ声がリズムの秩序を生み、その秩序が共有される。これがないと「ぽん」で同時に“手”を出し、その瞬間に勝負が決まる面白さや、「じゃんけん」と手を振り上げるわずかの時間に次に出す“手”を意思決定しなければならないというスリルは生まれません。「あいこ」が何度も連続して緊張感が高まっていく途中で、理由の分らない笑いがこみ上げたりもする。この不思議な面白さは、逃げることの許されない一定のテンポとリズムという秩序や拘束があって、はじめて生まれてくるものです。～

7. 構築と崩壊

～逆に、秩序とその拘束力が、乱れたり破綻することでかえって面白さを生む場合もあります。たとえば「だるまさんが転んだ」。このオニが創造性に溢れた子どもであるか否かは、この遊びの面白さを大きく左右します。オニがただ「だるまさんがころんだ」と規則正しく繰り返していたのではちっとも面白くない。「んぐアアあああああ

るまさ、んがこー。。。ろ。。。。んだっ！」とかやるよね。あれは時間の秩序を崩壊させることで相手のエラー（動いてはいけないところで動いてしまう）を誘っているんです。そういうオニの企みと、それに翻弄される面白さを味わいつつ、その時間の罫をかくくぐって密やかで素早い移動と瞬間的なフリーズをしてやろうとする他のメンバーの意欲がぶつかり合い、タタカウことにわくわくする。それから、「座り相撲」とか「手押し相撲」という遊び。対面で両手の掌を合わせて押したり引いたりする。で、倒れたり、前や後ろに踏み出したり、台から落ちたら負けっていう…知ってますか？今度この授業で試してみましょ。これらは音楽の本質が見事に表れている遊びです。言うまでもなく、「だるまさんがころんだ」では音、まあ、この場合は声、それが重要な要素で、「座り相撲」や「手押し相撲」は音とは無関係です。でも、それをやっている時の“生き方”のありようは同質なんですね。～

本稿冒頭に「保育の現場において「音楽」という名のもとに行われる諸活動の詳細な分析を」という一文を記したが、それは上記のような投げかけを経て、様々な動作分析や楽曲分析を行うことでなされていく。その過程において、秩序の構築と崩壊という仕組みが音楽の本質と密接に関わっており、その面白さを生み出す原動力となっている実例を示していくのだが、それについて書くことは「教材研究」に類することであり、膨大な記述や譜例を要するうえに、本稿の主旨からはなれることになるのでここでは取り上げず、別稿に譲ることとしたい。

～さて、「音楽って、どういうこと？」という問いからはじまって、ここまで考えてきました。とりあえず、次のようにまとめてみたいと思います。

「音楽とは、ある切り取られた時間の中を、秩序を強く意識しつつ、一瞬一瞬、今我が身に起っていることに耳をすましながら、ほんの少し先の望む未来に向かって本気で生きる、という生き方のことである」

まだこれでは不十分かもしれませんが、とりあえず先に進みましょう。～

8. 表現ということ

無言カウントの実験の中に“表現”はあったか、と学生に問うと、「特にない」「手を叩いたこと」などと答える。実際には、目は虚空を見据え、唇がかすかに動く、15カウント目が近づくにつれて小鼻が見る見る膨らんでいく、カウントの間ずっと首がひょこひょこ動く、近くの者と視線を交わして微笑むなど、実に多彩な表現が見てとれたのだが、自覚はされていないようである。

～「握った手がびくんびくん」とか「凄い目ヂカラで」とか、きゃーきゃー言っただけ、あれはなんだったの？～

「そういうのって、表現なんですか？」

～なんですか？ っ、まさにそれでしょ、表現というのは～

「だって、そういうのは、ただ、そうなっちゃったっていうだけで、表現っていうのはちょっと…」[何かを決めて、それを歌で表すとか、体の動きで表すとか]

「表現」とは予め想定した何かを表すことであって、それはたとえば頭の横から両手を突き出して中腰で飛び跳ねて「うさぎさん」だとか、右手はグーで左手はチョキでかたつむりい、だったり、楽しい歌を「楽しく」歌うことで「楽しさ」を、悲しい歌を「悲しく」歌うことで「悲しみ」を、といったようなことなのだという。

～なっちゃった、っていうのが表現なんです。心が動く、体を感じる、そういうときに、表情や仕草や行動や声に現れる。それが表現。予め想定した何かを表す、というのはただの「手続き」であって、表現ではないのです。そういうデリカシーに欠けた手続きの手段として扱われるのは音楽にとって一番不幸なこと。それをした瞬間に音楽は死ぬ。表現も死ぬ。そして子どもは新しい自分に会うチャンスを逸してしまう。大事な「！」が大人の貼ったお名前シールで見えなくなっちゃう。それからもうひとつ。「音楽」というのは、それ自体が「そのように生きる」という表現だから、「音楽によって何かを表現する」ということはあり得ないんです。～

9. 違和感

「保育所保育指針」の「表現」領域の項(平成29年7月版P.170)にこんな記述がある。

～音楽やリズムに合わせて体も動かすという経験を通して、子どもは、楽しい気持ちをこうした方法で表現することの喜びを味わう～

前後の文脈から察するに、ここでは「音楽」や「リズム」という語が、あくまでも外部からの音情報という意味で使われており、この点がまず腑に落ちない。百歩譲って「～に合わせて体も動かす」はどうか？ 「も」とは何だろう？ 他に何を動かすのだろうか？ 「かす」も気になる。ここはむしろ「く」に近いはずだが、それもまた百歩譲れば、まあ、そういうことはあるかもしれない。けれども、それによって「楽しい気持ち」(「楽しい」という大雑把で決めつけ的な言葉遣いも気になるが)が生じる可能性はあっても、「～に合わせて体も動かす」ことそれ自体が「表現」であり「楽し」さであり「喜び」なのであって、「～に合わせて体も動かす」という「方法」によって「楽しい気持ち」を「表

現]するわけではない。やはり「かす」と「く」の違いは大きい。「かす」という“意図”を示唆する語が「方法」という発想を導き出している。このような記述には、どうしても“音楽”や“表現”を、何らかの二次的目的達成のための手段または手続きとして捉える考え方が見え隠れし、それは音楽という神秘的な営みの純度を貶めるような気がしてならない。「ムーシケ」は人為ではなく「ムーサ神の成せる業」とした古代ギリシャ人の慧眼に思いを馳せたい。

「はじめに」で述べた、～保育現場における“音楽”や“表現”指導のありかたにある種の違和感を感じて～いる、というのは、実にこのへんのことである。

学生の言葉遣いも気になる。「楽しい歌を楽しく」「悲しい歌を悲しく」とはいったいどういう意味だろうか？「楽しい歌」や「悲しい歌」というものはない。それらは歌詞と音で構成された仕掛けにすぎない。歌ってみたら楽しかったり悲しくなったりすることはあるだろう。だが、それは人の裡に起ることであって、歌そのものには楽しいも悲しいもないのである。「悲しい」とされる歌を歌ったら嬉しくなってニコニコ微笑んだら、それは間違いなのか？いや、「悲しい」や「嬉しい」と安易に言語化することは子どもに失礼だ。筆者もうっかりこういう言葉遣いをしてしまう。その歌を歌ったら「！」だった。と書くほうがまだしも正確かもしれない。子どもは生活の中のあらゆる瞬間に無限の「！」を「きく」。そしてその時その瞬間に起った無名の思いや衝動によって何らかのリアクションをする。それが表現であり、それを「指導」することは絶対に出来ない。そのことを、学生はまず知り、彼ら自身が「きく」体験を積み、子どもの生という現象を正確に「きく」耳を持つことが必要である。

10. “きく”ということー2

普通我々は、自身の語彙にない事象は認識しにくく、見逃しやすく、気付きにくい。運良く気付いても、知っている語彙ファイルにそそくさと分類して事なきを得る。これは大事な能力で、これができず、すべての事象が唯一の意味を持って孤立し、名付けられずに放置されているのは社会生活が困難になることは確かだから、その状態を恐れ、回避しようとする。このファイリングの過程では正確さが犠牲にされる。個々の事象の細部にまでいちいち耳をすまして「きいて」いる暇はないため、慣れ親しみ、コミュニティの中でのコンセンサスが約束されている(と思い込んでいる)語彙や概念の枠組みにすばやく取り込むことが優先されるからだ。これが習慣化されると、やがて人は既知の語彙や概念ありきで、そのバイアスを通して事象を見るようになる。それ

は社会人としてまともであり、必要な生き方である。ところが、子どもはそうやって生きているのではない。

子どもにとって大切なこと、本能的に欲しているのは、ただ正確な事実認識である。だから目の前や我が身に起っている事実そのものを五感を総動員して「きく」。言葉や概念に置き換えて解釈するのでは決してない。今、起っていること、今感じていることが「そうである」という事実が重要であり、そして事実は常に流動的である。言葉を介さない正確な事実認識をリアルタイムで絶え間なく行おうとする生き方、それはつまり“音楽”である。一心不乱に砂を掘るとき、のたくるミミズを見つめるとき、太陽に顔をかがして目をつむるとき、積木の塔のてっぺんに最後のピースを乗せるとき、彼らの生き方は音楽そのものだ。そのように生きながら、子どもはやがて自身のリアリティを手がかりに、ゆっくりと様々な事象を自分で名付け、概念化していく。この、いわば社会適応力の獲得と引き換えに、「音楽のように生きる」という美しい能力は次第に影を潜めていく。芸術や体技を志すようになるのは、この喪失に抗おうとするタイプの人間なのかもしれない。

子どもには、やがてフェイドアウトしていくかも知れない、自身の生という音楽を「きく」静かな時間が必要だ。今それをしないと、二度と経験できないかも知れないのだ。しかし、大人は自分の理解可能なロジックの中に子どもを丸め込んで解釈したいという焦りから、この静謐でかけがえのない場面に安易に言葉を振りかざして介入しがちである。そして、そのような身勝手な行為を、もしや「共感」「声かけ」「代弁」などの言葉に置換え、それを笑顔でくるんで正当化しようとしてはいけないか？歌だ器楽だリズムあそびだという前に、そこを省みなければならない。

冒頭に挙げたシラバスには、～保育の現場において「音楽」という名のもとに行われる諸活動の詳細な分析を通して、それらの活動における真の意味での「音楽」発現の可能性を考える。～とあるが、まずは『特に「音楽」と認識されずに行われている諸活動において、真の意味での「音楽」が発現しうることに気付くこと』の必要性を感じている。これは書き加えてもいいかも知れない。9項最後に述べた、～子どもの生という現象を正確に「きく」耳を持つ～とは、そういう意味である。

おわりに

我ながら無謀なシラバスを立てたものだと感心する。「音楽表現指導法」についての考察が「音楽表現の指導は不可能である」あるいは「するべきではない」かのごとき物言いが終わっているのも奇異に映るかもしれない。だがこれは本当のことで、その認識に立って「指導」について考えるべきなのだ。

「指導」を考えるにあたっては、正確さと美、情緒的側面を排除した合理的な提示、などについて詳しく述べなければならないであろう。また「音楽によって何かを表現するということはある得ない」という考えについてもまだ説明の必要性を感じている。それらについては、詳細な教材研究に類することと共に、稿を改めて考察してみたい。